

住職法話「父の33回忌にあたり」

本年は私の父、速水壽貫の33回忌にあたります。3月が命日なので家族でその時に法事は行ったのですが、樹木葬で新しい方々も増えましたし、この機会に私がよく法事で皆様にお伝えしている法要の意味合いを説明したいと思います。

うちのお寺では葬儀(別名:1回忌)から一周忌(別名:2回忌)まではそれぞれ特別な意味合いを持つ法要で、3回忌以降の回忌供養(3回忌、7回忌、13回忌、17回忌...)と呼ばれる法要は10年に2回ある故人を忘れずに振り返り、感謝する為の法要ですとお伝えしています。ただ、この法事の説明は宗派や寺院、あるいはお寺ごとでさえ違いますと伝えています。

例えば13の仏様に33回忌まで、故人の生き方によってはお裁きを受けるのだ、という考え方があります。他にも両極端(2極)を超えて中道を目指す仏教の姿勢から「3」という縁起の良い数字に法事を行う、六道を超えた先に仏の世界に行かれますようにということで「7」のつく時に法事をするのだとも言われます。これ以外にもいくつもの考え方がありますが、どの意味合いを込めて法事をするかは皆様やお墓のあるお寺の考え方次第だと思います。

もう一つ、いつまで供養すれば良いですか、ということをよく聞かれます。33回忌が終わり、と一般的に言われるのは上記の13の仏様のお裁きが33回忌まで続くという考え方を元にしています。そこまでいけばどんな方もお裁きが終わるから弔い上げ(とむらいあげ)で先祖代々に組み入れて拝むんだという形です。

うちのお寺でも一つの目安として33回忌と伝えることはあります。平均寿命で亡くなった親御さんを供養した場合、子供世代が供養できるのは33回忌くらいまでだからです。しかし、例えば早く亡くなった家族がいた場合、早めに33回忌を迎えます。それこそ私自身が最初に申し上げたように父親の33回忌を迎えてしまいました。この場合、父親の供養を個別でせずに先祖代々に繰り入れてしまって良いのでしょうか。余り良いことではないでしょう。逆に両親が100歳を超えるくらい長生きした場合、子供さん達は70歳程度でしょう。そこから33回忌まで子供さん達が供養できるでしょうか。もしできなかった場合は孫世代が引き継いで行うのでしょうか。私は難しいと思っています。うちのお寺が重視しているのは自分と縁の深い方、主に両親や兄弟、夫、妻のことを自身が生きているうちは忘れずに振り返り、供養してあげてくださいとお伝えしています。

先ほどの100歳を超えて親御さんが亡くなった方の場合、子供さん達が生きている間の法事(平均寿命の場合は17回忌程度)は必要だと思いますが、その下の孫世代はご自身の親世代の供養を考えるべきであり、祖父母世代に関しては親の供養の際に「先祖代々」として供養する形で良いと思っています。逆に私のように親が早く亡くなった場合、自分が元気なうちは法事を行うべきでしょうから33回忌で終わりとはならず、平均寿命で考えた場合は77回忌くらいまでやるべきなのでしょう。まだまだ先は長そうです。

仏教はその名の通り「お釈迦様(仏)の教え」を説いているもので生き方や考え方に関する記述が多いです。ただ、その中には死後の世界観、仏の国のことも説かれています。日蓮宗で一番大切だと伝えているお経は『法華経』の中にある『妙法蓮華経如来寿量品第十六』です。ここには意識すると「お釈迦様は人の身としては滅ぶけれど、仏の世界から他の方と一緒にずっとこちらの世界を見守っている。いつでも常に我々をどのように救おうかと考えているのだ。」と伝えられているからです。まさに我々日本人がもつ死後の世界観だと思いませんか。

この『法華経』は聖徳太子の頃に日本に入ってきた日本最古のお経の一つです。そして日本の仏教諸宗派の大本となった天台宗においても『法華経』が基盤となっていると言われてますし、日蓮宗以外の各宗派でも多く読まれているお経です。このように聖徳太子の頃から連綿と仏教の中で引き継がれてきた『法華経』、それは日本人がもつ死後の世界観に多大な影響を及ぼしています。例えば、仏教以外の世界三大宗教であるキリスト教やイスラム教は亡くなった故人はいずれ復活する日まで休むだけ、と考えることが多いです(様々な分派・宗派あり)。あくまで信仰対象は神様を中心としたものであり、多神教の仏教が伝わった日本のように亡くなったら今度は仏様として見守る側に立つ、というのは世界からみると珍しい考え方で。ただ、私は故人たちと縁が切れなくてとても良い教えだと思っています。

この教えを元に私は皆様に供養をしましょうと声がけをしています。いつも見守ってくれている故人たちに対して我々は故人たちのことをいつも考えているでしょうか。忙しく、日々悩みがあふれる世の中ですからなかなか難しいでしょう。だからこそ、定期的に行う回忌供養などの際に家族や親族など「故人が見守っている人々」で集まり、我々の感謝や親愛の想いが変わっていないか、忘れていないかを確認して故人たちを供養するのだと説明します。

私も33回忌を迎えたこの機会に父のことを少し振り返りたいと思います。当寺院は元々境内が狭い、東京の小さなお寺でした。その為、檀信徒の方にはお墓を遠方の多摩霊園などにたてて頂くなど多くのご不便をかけていました。だからこそ、父は「皆様にたくさん来て頂けるように広い本堂を建て、境内に墓地を持ち、皆様が良く供養できて、良いお寺だと言って貰えるようにしたい」と東京のお坊さん仲間へ言っていたそうです。そして当時の住職だった祖父と移転を進めました。東京のお寺の土地売却に始まり、移転候補地探し、土地の買収、お寺の設計や役所への申請など、全ての作業に父が携わったこともあり移転事業は数年に及ぶ激務でした。その為か、お寺の移転をしてから3年ほどで父は亡くなってしまいました。ただ、その想いはこのお寺の広い本堂や客殿、境内の墓地として受け継がれています。平成元年の移転から35年程が経ち、葬儀の場所はお寺から葬儀会館が中心となり、核家族化・少子化の影響で法事などの参列者は少なくなりました。本堂や法事が小規模になっていくのは時代の流れだと思っています。ただ、「皆様が良く供養できて、良いお寺だと言って貰える」という想いは私も継いでいきたいと思っています。